

4

INET91, ISOC, INTEROP, IAJ

—石田晴久先生とともに

(財)インターネット協会／元多摩美術大学

高橋 徹



1991年6月、私は村井さんに誘われて、コペンハーゲンのINETに行った。娘の桃子が同行した。INET'91の現地では、相磯先生ご夫妻と石田先生、WIDEプロジェクトの面々、NTTの方々、30人ほどの日本人がいた。石田先生は雨の英国を旅してから、デンマークにやってきていた。「イギリスは、雨が續いて面白くなかった」と言われたので、次にロンドンに行く予定の私は、つい、来週はどうですか、と聞いたのだった。もちろん、石田先生に天気予報をうかがうつもりだったわけではない。新婚の加藤朗夫妻と同じフライトで行った翌週のロンドンでも雨模様は續いていた。

石田先生にお会いするようになったのは、村井さんや坂本文さんを通じてだった。坂本文さんは、1985年にDCL^{☆1}に移ったときに知り、彼女の上司になったせいで、jus (Japan UNIX Society) の会長だった彼女のバックアップをするように言われていた。jusの理事会制度ができたときに、ビジネス部会から選ばれて、理事会メンバーとなった私は、jusの先輩にK2こと岸田孝一さんが初代の会長にいて、2代目の会長が斎藤信男さんで、3代目が坂本文さんといった歴史を学んだばかりではなく、UNIX Fairを主催し、UNIXの標準化・統合化動向の担当になっていた。私たちの理事会は、富士通の中尾正克さんを4代目の会長に選んだ。

石田先生にある日、先生はjusができるときに、なんだったのですかと聞いた。初代会長の岸田さんたちと一緒にUNIXの研究会をやっていたんだよ、その会長だった。という答えだった。だから、jusのできる前の会長なんだ、と。そのことにこだわり続けておられた印象である。

1991年のINETのときに、村井さんが、来年は日本でやるぞ、と叫んでいた。それが正式に決まり、INET'92は神戸に決まった。実行委員長が相磯先生、プログラム委員長が石田先生であった。そのときの石田先生の一番のご苦労は、諸外国からの参加者のビザ問題だった。神戸の昼食のときに、相磯先生と一緒に、すき

焼き弁当を食べながら、大変だった話を延々とうかがった。

神戸のINETで、Internet Society (ISOC)が発足し、Board of Trustees (BoT)に相磯、石田の両先生が入っていた。1993年から98年まで、BoTのメンバーだったと思う。

このINET'92の最中に、INTEROP社の社長Dan Lynchがやってきて、日本でINTEROPを開催したいと思うので、手伝ってほしい、というのである。村井さんと相談して、協力体制を作る、と答えた。すると、翌月になって、INTEROP社の副社長のDavid BrandinがDCLにやってきて、お前がほしい、どうだ、どうするのだ、というのである。私は、村井さんからIJ^{☆2}をやらないかといわれて、断っていた。それでこの話に乗ることになった。

INTEROPに視察団のツアーを組んで行きはじめたのが1989年だ。毎年、村井さんをコーディネータとして、私が企画主催を担って、当時私が扱っていたProteon社のルータの顧客を中心に客を募り、サンノゼのコンベンションセンターを視察して、毎晩のようにホテルの部屋で車座になって、ワインを飲みながら、村井さんを囲んで「帰ったら日本のインターネットをつくろう!」と氣勢を上げていた。

1993年3月に、私はINTEROP社に入社を決めたが、それはZiff-Davis社に売却されていた。日本のINTEROPの開催のために、必要な組織を準備しようとした。実行委員会の形式をとって、中立性を掲げて在来イベントと一線を画そうとした。誰をプログラム委員にするか、村井さんと相談した。

初代の実行委員長は石田先生、会社の方針でプログラム委員長に私、となった。東大の大型計算機センターに石田先生を訪ね、INTEROPの説明をして、実行委員

☆1 デジタルコンピュータ(株)(横河デジタルコンピュータ(株)の前身)。

☆2 (株)インターネットイニシアティブ。

長就任の快諾をいただいた。

7月には、INET'93がサンフランシスコで開かれ、その翌週がINTEROPだった。

翌年、プログラム委員会の全員をNetworld+INTEROPに招待した。ラスベガスだった。7月には、第1回のNetworld+INTEROP Tokyoが幕張であり、そのすべてに石田先生はつきあってくださった。

Networld+INTEROP Tokyoのプログラム委員会がたび重なって開かれるようになったとき、93年の夏、石田先生は会議が終わると同時にメモを私に示した。日本インターネット協会 (IAJ : Internet Association of Japan)の設立に向けて、会合を持ちたい、ということだった。その会合は、東大大型計算機センターで開かれた。そこには、ニフティサーブの中村明さん、ソフトバンクの宮内謙さん、IBMの松崎功保さん、ほか多士済々のメンバが集まっていた。議長は石田先生で、年内に設立しようということになった。

1993年12月4日、日本インターネット協会設立総会の場所は朝日新聞社の講堂だった。会長:石田晴久(東京大学)、副会長:村井純(慶應義塾大学)・岡田智雄(ニフティサーブ)、事務局長:高橋徹(ジフ・デービス ジャパン)の顔ぶれだった。事務局はジフ・デービス ジャパンの中に置かれた。

石田先生は、N+Iのプログラム委員会に参加して、これをコアにして日本インターネット協会を設立しようと企図し、上手くいったように思われた。あとは事務局が踏ん張るしかない、と私は思った。坂本文さんが事務局員になったが、お産で退職、藤野美智子さんが後を引き継いだ。

石田先生にお世話になったのは、いくつもある。情報処理学会に加入したときの推薦人を引き受けてくださった。94年の暮に東京インターネット(株)を立ち上げたときには、何度も報告に行き、インターネットのプロバイダがやることの相談にのっていただいた。もちろん、日本インターネット協会についての相談もあり、孫正義さんを一緒に訪ねて、協力を要請しに行ったこともあった。

探せば写真が出てくるのだが、APCCIRN (Asia-Pacific Coordinating Committee for International Research Networking) 後の APNG (Asia Pacific Networking Group) 会合の1993年の台北、94年の北京と一緒に参加した。そのときのことを思い出した。特に台北では、先生は懐かしそうに、私は台湾で育ったのですよ、と言っておられた。

石田先生がAPNGの会長をされていた1998年2月、私はAPNIC (Asia Pacific Network Information Centre) のExecutive Committeeの選挙に出なさいと

言われて、ノミネートされてExComのメンバになり、Chairになった。全部石田先生の根回しのおかげである。そのせいでAPNICが日本からブリスベンに移るのに立ち会い、初代のDirector General (DG) だったDavid Randy Conradが辞任した後の人選に携わった。7月初め、DGを選ぶのにKPMG社の専門のExecutive Searchに依頼して、世界中から応募を得て、初代のAPNICのChairであるGoeff Hustonたちと一緒に人選した。その結果、現在のDGであるPaul Wilsonが選ばれた。そのPaulはいまだにDGを続けている。このとき短い間に大変な経験をしたのだった。帰国してそのことを先生に告げた。すると、石田先生は、アジア太平洋地域における日本としての責務を果たしたと、喜んでくださった。

のちに、旧IAJ幹部会の食事会が毎年あり、幹事は持ち回りで行っていたが、去年は途切れてしまっている。そろそろ次の回を開きませんか、とおっしゃるのは、いつも石田先生だった。楽しみにされていた。

1997年、私は東京インターネットの会長になっていた。日本インターネット協会の会長を替わってほしいと石田先生からいわれて、私が2代目会長になった。1999年にはIRI^{☆3}の上場に巻き込まれたりして、多くの場面でご一緒した。中でも、甲府に講演に行き、石和温泉に泊まり、昇仙峡を歩いたときのことは忘れ難い。林英輔先生と石田先生の奥さまとご一緒だった。

2000年の初めに、多摩美術大学の情報デザイン学科の教授が急にやめたので、その穴埋めに2年間来てほしいと言われて、急遽、書類を作成して、学科長の石田先生に示した。先生は、教授会には出なくとも問題はありませんかから気楽に、とおっしゃる。たしかに、多摩美は自由な雰囲気だったが、教授会にまったく出ないわけにはいかない。

東大で学生の教育に没頭することがなかったので、多摩美では女子学生も多く、楽しそうにしておられるのだった。授業が終わって、研究室で出会うことが多かったが、そういうときにはほとんど学外の、業界動向の話題だった。

ある日、「インターネットが普及したので、協会も、当初の普及啓発活動の目標を達成したと思う、役割が終わったら、解散するのがいいと思う」と、突然言われた。しかし、財団法人に生まれ変わろうとする手続きを進めていたときである。「始めるエネルギーよりも、幕引きのエネルギーのほうが大きいし、まだやることがたくさんあります」と答えた。事実、spam問題やらCyber Crimeやら、IPアドレス枯渇問題など、山積している

☆3 (株)インターネット総合研究所。

課題に取り組んでいる今のIAJapan^{☆4}の活動を見ていただきたい。

石田先生は、誠実で、機を見るのに敏く、およそ先読みをして外れることがなかった。さらに、軽快なフットワークで、手まめで、いつの間にか新著ができあがる。今ここにおられれば、あれを話したい、これを相談したいという思いが込み上げてくる。

☆4 (財)インターネット協会 Internet Association Japan.

石田先生、ありがとうございました。満腔の感謝を捧げるとともに、今はご冥福を祈るばかりです。

(平成 21 年 4 月 22 日受付)

高橋 徹 toru@riis.jp

東北大学文学部卒業。東京インターネット(株)社長を経て、APNIC 議長、INET2000 横浜大会議長など歴任。現、(財)インターネット協会副理事長、(株)インターネット戦略研究所代表。元、多摩美術大学教授。

石田晴久先生への想い

学会誌「情報処理」4月、5月、6月の各号と19年前に発行の「学会30年の歩み」を広げながら、石田先生の思い出を探っています。

4月号に「名誉会員 石田晴久博士を偲ぶ」を発見して、呆然自失、我と我が目を疑いました。倒れられた前日の3月2日に、上野の国立科学博物館での「情報処理技術遺産と分散コンピュータ博物館認定式」で、お会いしたばかりでした。村井先生の深い悲しみをソフトに包んだ追悼文とご略歴を読みながら、先生の思い出が、とり止めもなく浮かんできます。

最初の印象は、東大大型計算機センターで、近づきたい森口先生や後藤先生の中で、いろいろと相談に乗っていただきました。「後藤先生は、メールより2次元のFaxが便利だ、と主張されて困るね」などとおっしゃっていたのを懐かしく思い出します。また1978年の第3回日米コンピュータ会議や89年のIFIP Congressではサンフランシスコで一緒でした。特にわたくしが退職1年後に開かれた、30周年記念国際会議の当時は、まさに53歳の大型計算機センター教授として、最も活動されていた時代でした。プログラム委員長として、論文の収集、査読、海外交渉など、引き受けていただきました。特にアップルのSteve Jobsの素晴らしいアニメ実演の実現には、石田先生ならではのお骨折りをいただきました。

このたびの総会で功績賞を受賞された山田昭彦先生は、当時は情報処理学会の理事で、IEEE-CSの理事も歴任されていましたが、それ以来メールで学会の様子などをうかがってきました。国立科学博物館での認定式もそのお誘いでした。それで石田先生の動静もそれなりにうかがっていました。

わたくしより一回りも若く、これから沢山の構想と夢を抱いておいでの先生が急逝されたこと、6月号の白鳥新会長就任のご挨拶「50周年と新たな旅立ち」を読むにつけ、学会は献身的な会員の奉仕に支えられ、発展していくのだとの思いを深くすればするほど、石田先生の急逝は悲しみを越えて、残念で残念でなりません。

(坂元真澄／元事務局長)

